

## 2.3 生物多様性

生物多様性とは、多くの種が生息する（種の多様性）ということだけではなく、それらが生息・生育することによって形成される生態系の多様性、同じ種であっても個性を未来へと引き継いでいく遺伝子の多様性を総合的に示すものです。河川では、山にその端を発し平野を流れ行きやがて海に至るまで連続的に環境が変化していきます。ここでは、上流～下流の流程毎の底生動物の生息状況や、本来あるべき生態系を脅かす可能性のある国外外来種の確認状況を整理しました。

なお、1～3巡目調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしかみられない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を検討するための参考です。

### 【河川流程別の生物多様性】

(底生動物調査)

- ・ **水生昆虫類の種数は上流だけでなく、中流域、下流域の上流側でも多い**

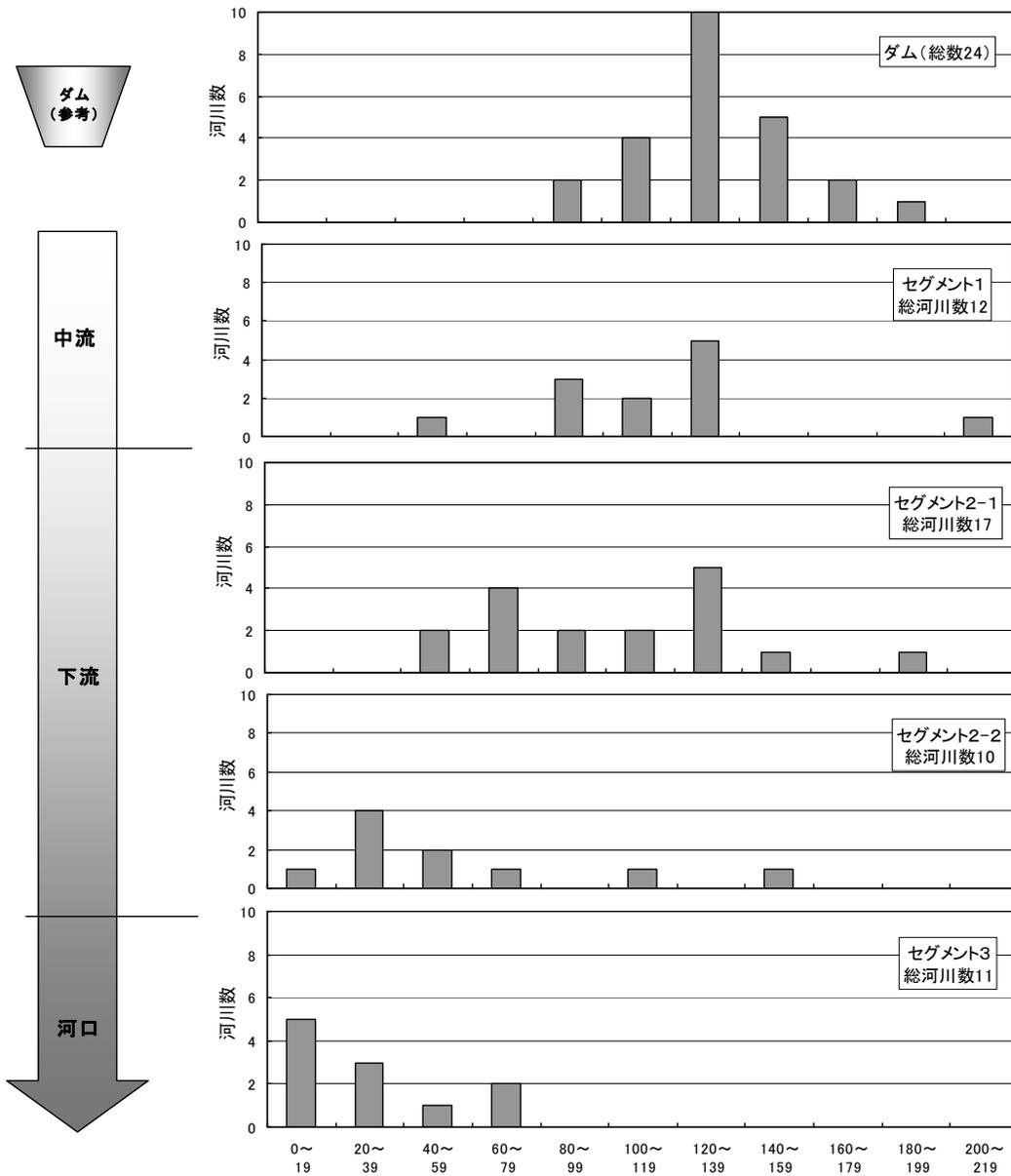
水生昆虫類の種数を流程別、河川別に整理しました。

一般に、上流ほど水質が良く生物の種数も多くなるように思われますが、中流域や下流域の上流側でも水生昆虫類の種数の多い河川が多くみられました。生物の多様性という視点から河川環境をみると、上流だけでなく中流や下流も同じように重要な区間であり、上流から下流までの環境全体が重要であるといえます。

(資料掲載：2-12 ページ)

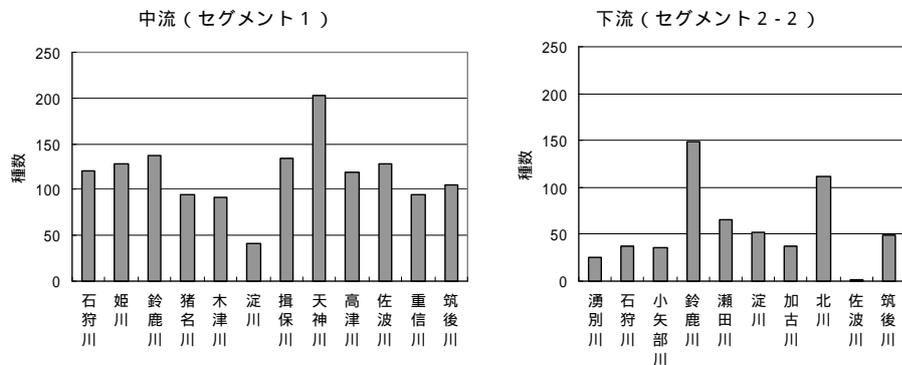
一般的に底生動物の種数は、河川環境の良好なところに多いことが知られています。特に水生昆虫類は水中の溶存酸素量や有機物量などに敏感な種が多く、水質環境を知る指標となります。ここでは今回とりまとめを行った一級河川 25 河川の調査地区を河川工学的区分<sup>p2-6 参照</sup>から上流、中流、下流、河口ごとに分類し、河川別、河川区分別の水生昆虫類の確認種数を整理しました。また、今回、調査を実施した河川と同一水系にあり、同時に調査を実施したダム湖の水生昆虫類の確認種数を、参考のため河川と比較しました。

次項の図では、横軸に水生昆虫の確認種数（レンジ）、縦軸にその種数の範囲が確認された河川数もしくはダム湖数を示しています。また、中流（セグメント1）と下流（セグメント2-2）の河川別の確認種数をグラフで示しました。同じ流域区分であっても河川によって確認種数に大きな差がみられました。例えば、中流域で天神川のように 200 種以上確認された河川がある一方、近畿地方の淀川のように 50 種に満たない河川もみられました。また、下流域でも中部地方の鈴鹿川や近畿地方の北川のように 100 種以上とほかの河川の中流域と同程度の河川もありました。このように、一般には上流ほど水質が良くそのため水生昆虫の種数も多くなるように思われますが、下流域の上流側でも種数の多い河川もみられました。これは、水生昆虫の種数が水質の清澄さだけでなく、水温や餌の内容や量など多くの条件に依存しているためです。河川環境を生物の多様性という視点でみた場合、上流の清流だけでなく中流や下流も重要な区間であり、河川の生物多様性を保全するためには上流から河口までの河川全体での環境が保全されることが必要であると考えられます。



水生昆虫類の確認種数別河川数の流程による比較

(注：上流 (セグメント M) は直轄管理区間外の場合が多く、調査データが少ないため省略した)



水生昆虫類の中流、下流別の河川別確認種数の比較  
(該当セグメントのある河川のみを示した)

【生物多様性の攪乱：国外外来種の確認状況（アメリカナミウズムシ、アメリカツノウズムシ、フロリダマミズヨコエビ、コモチカワツボ）】  
(底生動物調査)

・ 3 巡目調査まで確認のなかったアメリカツノウズムシを 4 巡目調査で 4 河川で確認  
 近年、分布の拡大が懸念されている国外外来種のアメリカナミウズムシ、アメリカツノウズムシ、フロリダマミズヨコエビ、コモチカワツボの 4 種について確認状況を整理しました。  
 今回とりまとめ対象とした一級河川 25 河川中、アメリカナミウズムシは 6 河川、アメリカツノウズムシは 3 河川で、フロリダマミズヨコエビは本州の東北地方から中部地方の 10 河川、コモチカワツボは 2 河川で確認されました。1～4 巡目調査全体で比較すると、アメリカツノウズムシは 4 巡目調査で初めて 4 河川で確認されました。アメリカナミウズムシ、フロリダマミズヨコエビ、コモチカワツボは、3 巡目調査で初めて確認され、4 巡目調査で確認河川数、確認地区数の割合がともに増加しており、急速に分布を拡大していると思われます。

(資料掲載：2-15～22、2-37～38 ページ)

1～4 巡目調査の確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (80 河川)	2 巡目調査 (119 河川)	3 巡目調査 (121 河川)	4 巡目調査 (64 河川)
アメリカナミウズムシ	0 河川 〔0.0%〕	0 河川 〔0.0%〕	2 河川 〔1.7%〕	7 河川 〔9.4%〕
アメリカツノウズムシ	0 河川 〔0.0%〕	0 河川 〔0.0%〕	0 河川 〔0.0%〕	4 河川 〔6.3%〕
フロリダマミズヨコエビ	0 河川 〔0.0%〕	0 河川 〔0.0%〕	10 河川 〔8.3%〕	21 河川 〔32.8%〕
コモチカワツボ	0 河川 〔0.0%〕	0 河川 〔0.0%〕	8 河川 〔6.6%〕	11 河川 〔17.2%〕

1～4 巡目調査の確認地区数の比較

種類	1 巡目調査 (599 地区)	2 巡目調査 (890 地区)	3 巡目調査 (930 地区)	4 巡目調査 (459 地区)
アメリカナミウズムシ	0 地区 〔0.0%〕	0 地区 〔0.0%〕	13 地区 〔1.4%〕	23 地区 〔5.0%〕
アメリカツノウズムシ	0 地区 〔0.0%〕	0 地区 〔0.0%〕	0 地区 〔0.0%〕	6 地区 〔1.3%〕
フロリダマミズヨコエビ	0 地区 〔0.0%〕	0 地区 〔0.0%〕	50 地区 〔5.4%〕	90 地区 〔19.6%〕
コモチカワツボ	0 地区 〔0.0%〕	0 地区 〔0.0%〕	9 地区 〔1.0%〕	29 地区 〔6.3%〕

注 1；確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。

注 2；1～3 巡目調査のデータは対象全河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象とした。

注 3；( ) 内は分析対象河川数、地区数を示す。

注 4；〔 〕 内は確認河川数、地区数の分析対象河川数、地区数に対する%を示す。

国外外来種の中には、観賞用の水草や養殖魚などに混入して非意図的に持ち込まれることがあります。このような場合、在来種と形態が似ていると調査者が気付かぬうちに分布を広げて

しまう場合があります。ここでは、このような種についての確認状況を整理してみました。

アメリカナミウズムシは、北米原産の体長 1、2cm ほどのプラナリアの仲間です。日本では 1980 年代に名古屋市と横浜市の熱帯魚水槽からはじめて記録されました。1990 年代以降、徐々に分布を拡大しています。アメリカツノウズムシも前種と同様に、北米原産の体長 1、2cm ほどのプラナリアの仲間です。日本では 2003 年に碧南市の水族館の水槽からはじめて記録されました。その後、京都府や東京都から記録されていることから、今後の分布の拡大が懸念されています。

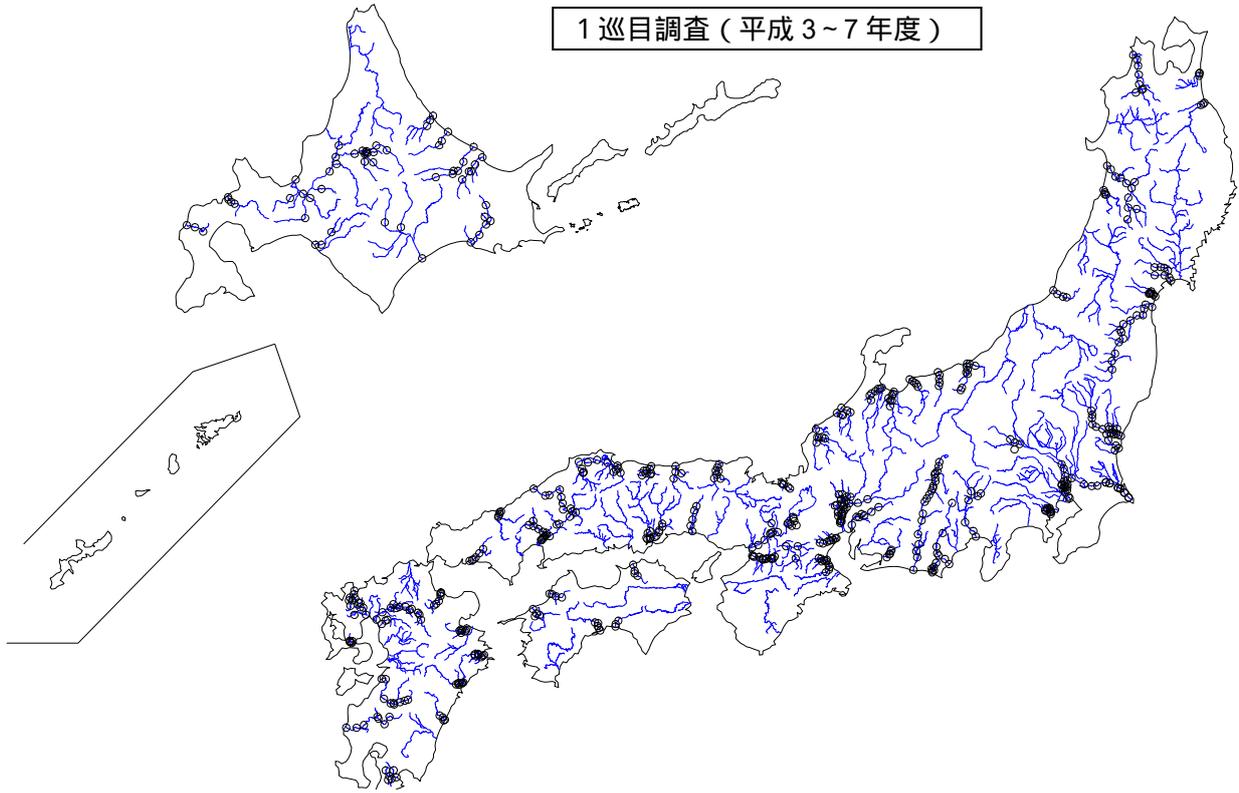
フロリダミズヨコエビは、北米原産の体長 1cm ほどの小型のヨコエビです。日本では 1989 年に利根川に流出する古利根沼の水路ではじめて確認されました。外国から持ち込まれた水草に付着して侵入したのではないかと考えられています。2000 年代に急速に分布を拡大し、近年では、東北地方から九州地方に至るまで広い範囲で確認されるようになりました。フロリダミズヨコエビは、1 年を通して産卵可能で、また、汚れた水や夏季の高水温にも耐性が高いといわれており、在来のヨコエビ類との競合が懸念されています。コモチカワツボは、ニュージーランド原産で北半球の亜寒帯～温帯域に広く分布します。日本では、90 年代に養殖場などで確認されるようになり、今では自然の河川でもみられるようになりました。生態系や在来種への直接的な影響はまだ明らかではありませんが、ホタル繁殖のための餌のカワニナの代用品として使用されていた例もあり、分布の急速な拡大が懸念されています。

アメリカナミウズムシは、河川水辺の国勢調査では平成 17 年度に淀川水系で初めて確認され、今回とりまとめを行った一級河川 25 河川では近畿地方の淀川水系と加古川で確認されました。アメリカツノウズムシは、河川水辺の国勢調査としては平成 19 年度に関東地方の多摩川で初めて確認され、今回とりまとめを行った一級河川 25 水系では、関東地方の相模川、近畿地方の猪名川、九州地方の筑後川で確認されました。

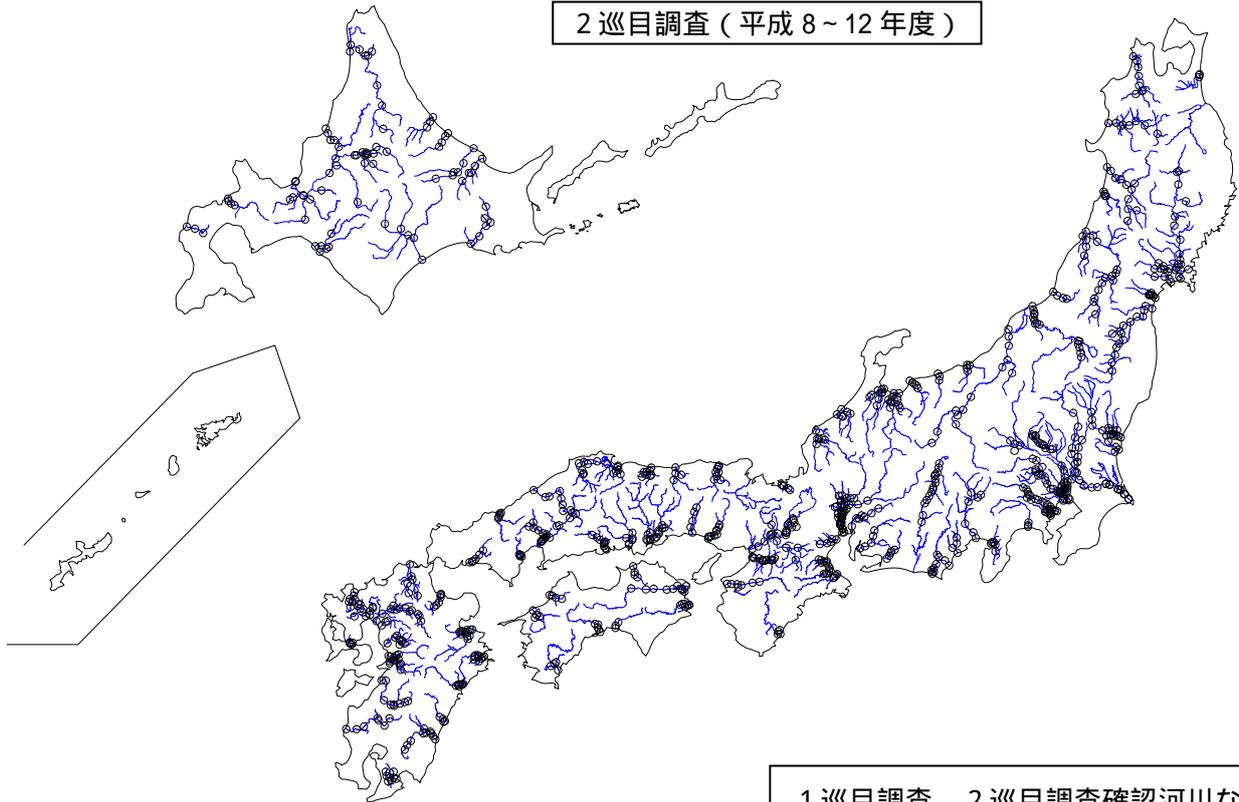
フロリダミズヨコエビは、河川水辺の国勢調査では平成 16 年度の調査ではじめて確認されました。今回とりまとめを行った一級河川 25 河川では、関東地方の相模川以西の 10 河川で確認され、平成 18 年度、19 年度の調査結果と合わせてみると北海道を除く全国の河川で広く確認されていることが分かりました。コモチカワツボは、平成 13 年度の調査ではじめて確認されました。今回とりまとめを行った一級河川 25 河川では、関東地方の相模川と北陸地方の小矢部川の 2 河川での確認でしたが、平成 18 年度、19 年度の調査結果と合わせてみると本州の東日本の河川で広く確認されていることが分かりました。

1～4 巡目調査全体での確認状況を比較すると、これらの種は、確認河川数、確認地区数の割合がともに 3 巡目以降増加しており、急速に分布を拡大していると思われます。これらの種が日本の在来種や生態系に及ぼす影響はまだ明らかになってはいませんが、いったん侵入すると個体数密度が激増する場合もあり、生息場や餌の競合など生態系への影響が懸念されることから今後とも注目していく必要があると考えられます。

1 巡目調査 (平成 3~7 年度)



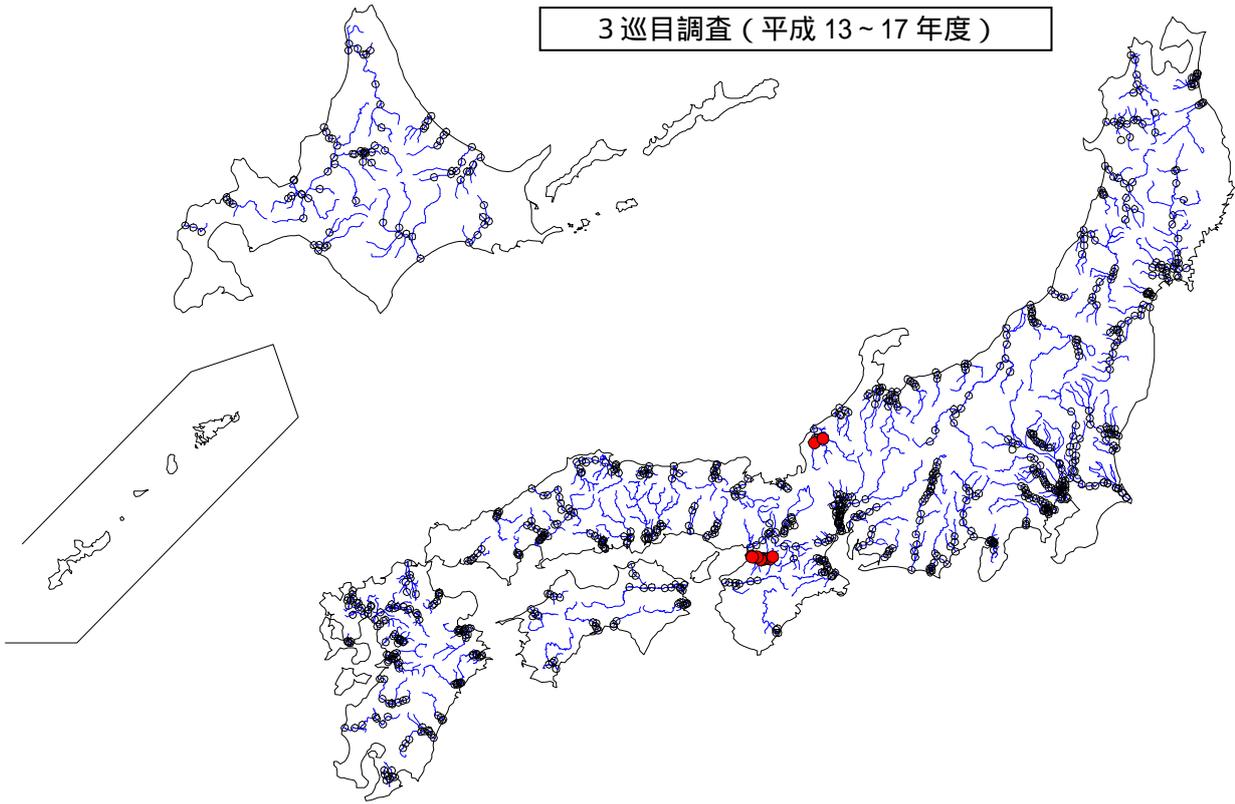
2 巡目調査 (平成 8~12 年度)



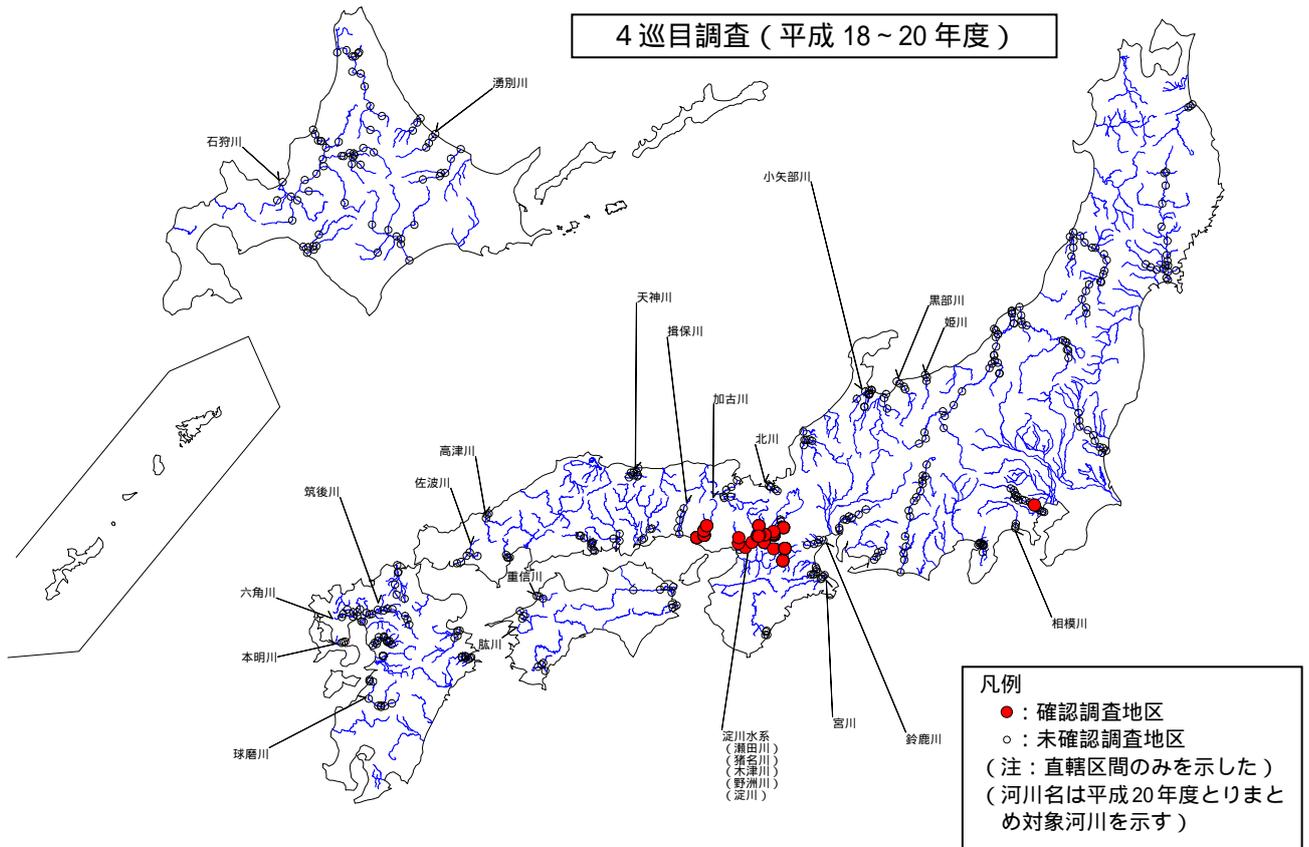
1 巡目調査、2 巡目調査確認河川なし

アメリカナミウズムシ確認調査地区 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査（平成 13～17 年度）



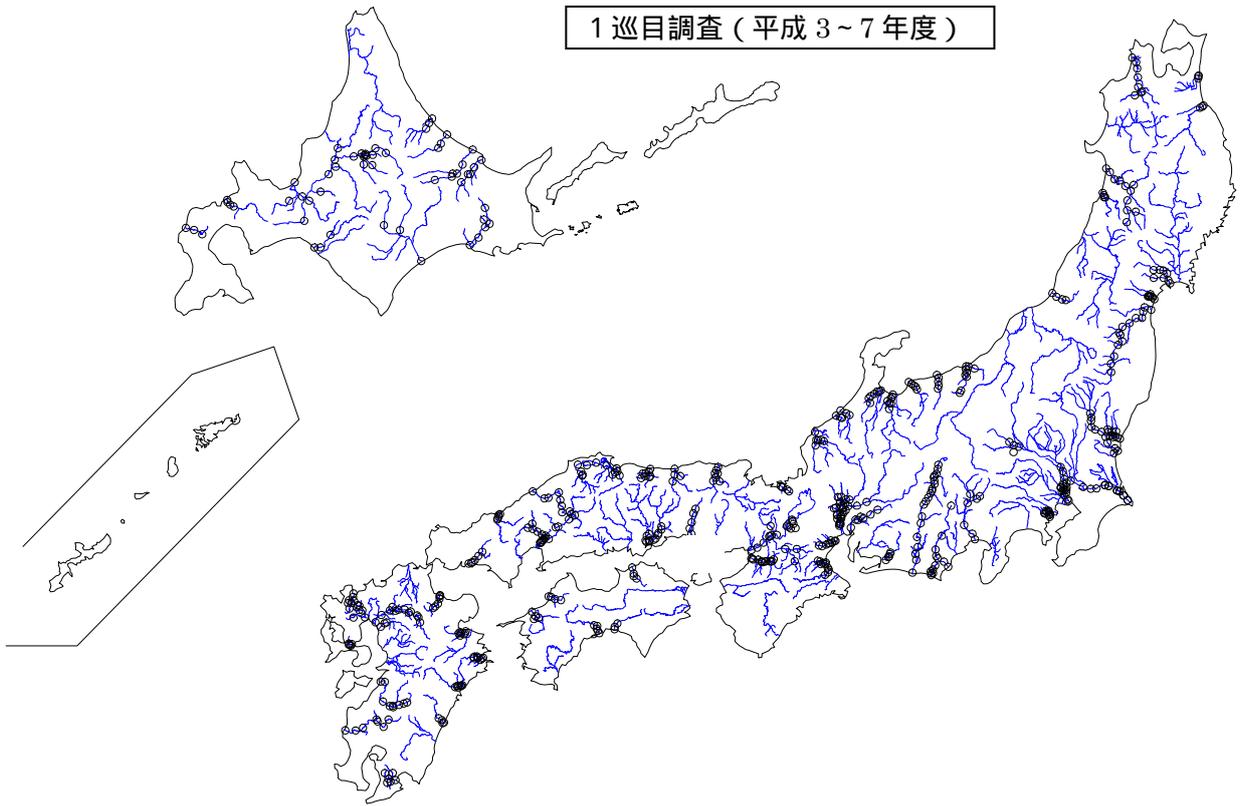
4 巡目調査（平成 18～20 年度）



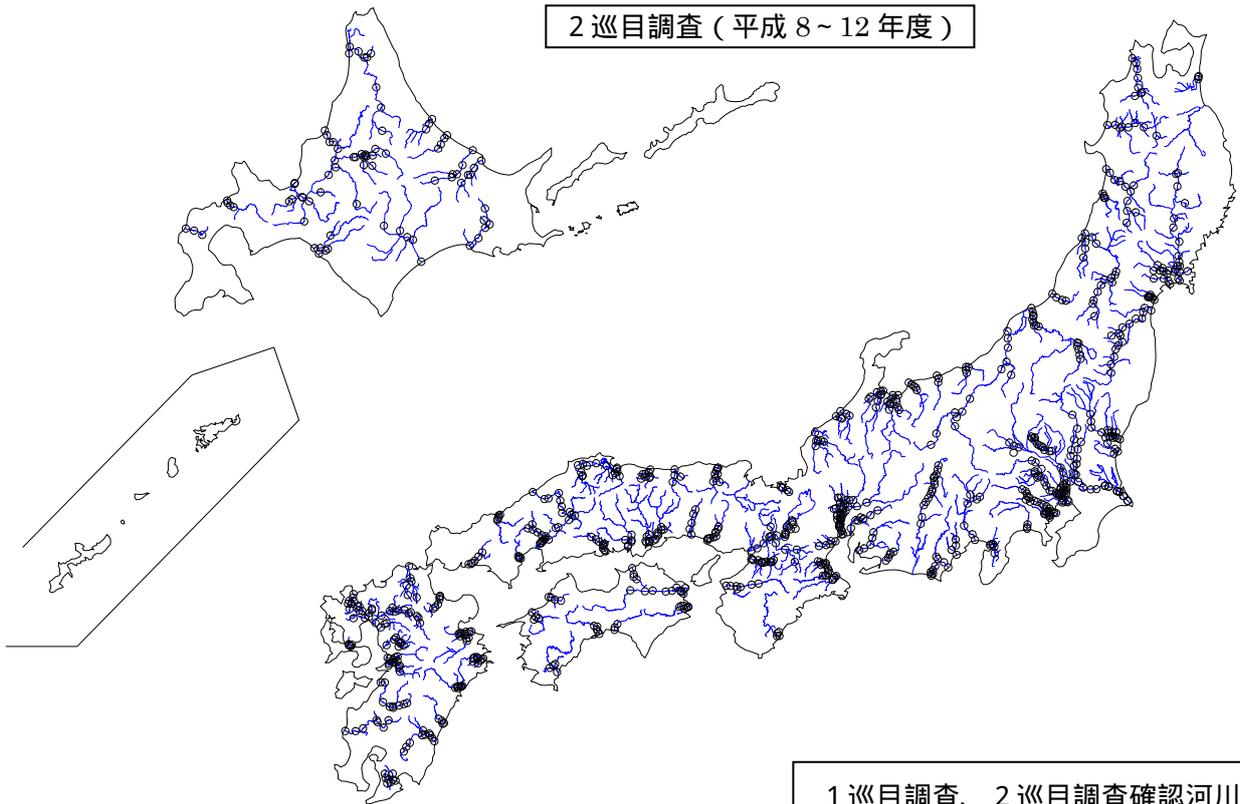
注）4 巡目調査は調査実施途中で、123 河川中 59 河川が調査未実施である。

アメリカナミウズムシ確認調査地区（3 巡目調査、4 巡目調査）

1 巡目調査 (平成 3 ~ 7 年度)



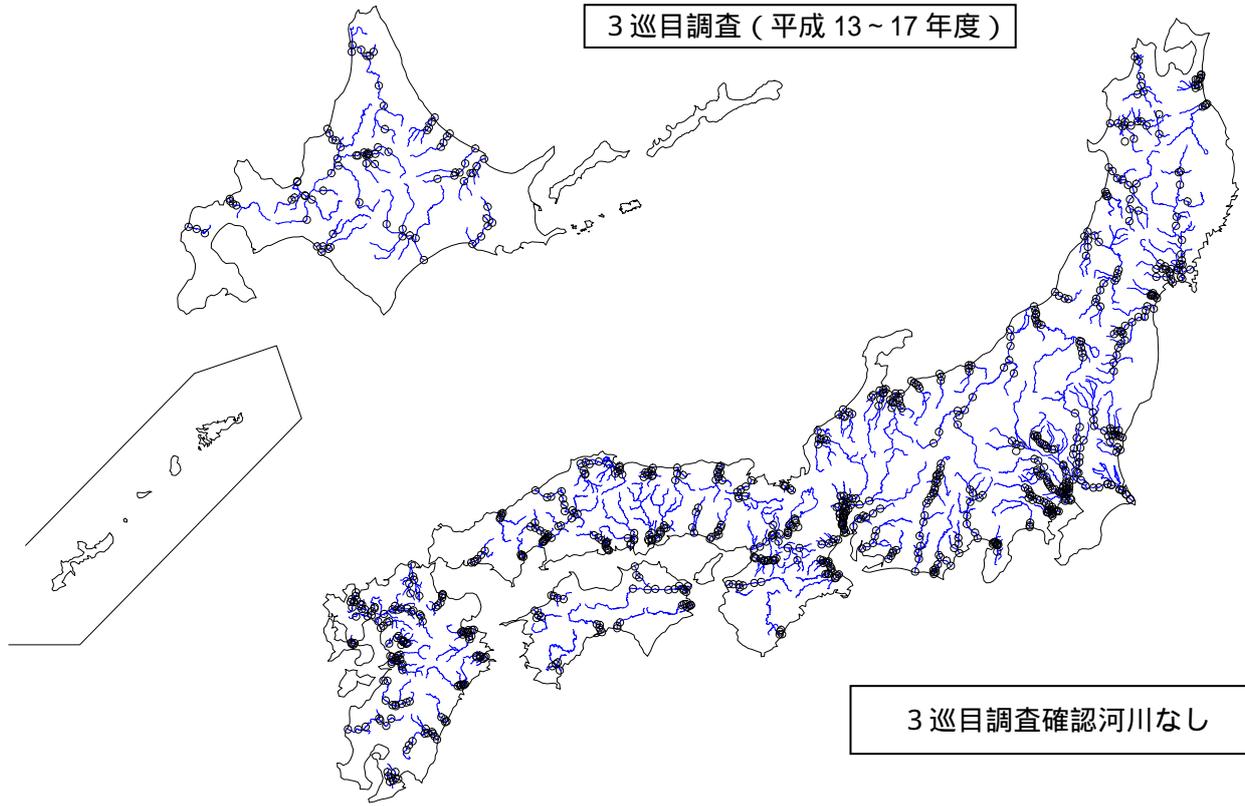
2 巡目調査 (平成 8 ~ 12 年度)



1 巡目調査、2 巡目調査確認河川なし

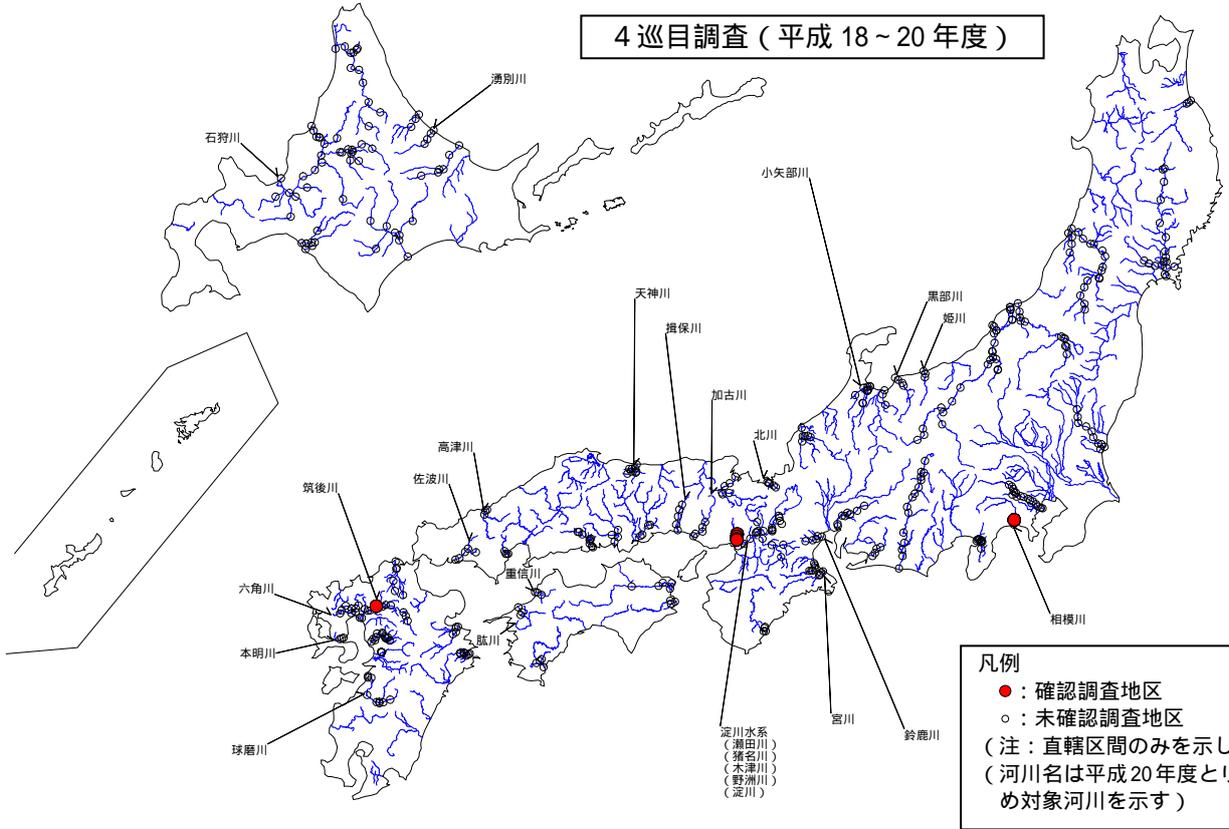
アメリカツノウズムシ確認調査地区( 1 巡目調査、2 巡目調査 )

3 巡目調査 (平成 13 ~ 17 年度)



3 巡目調査確認河川なし

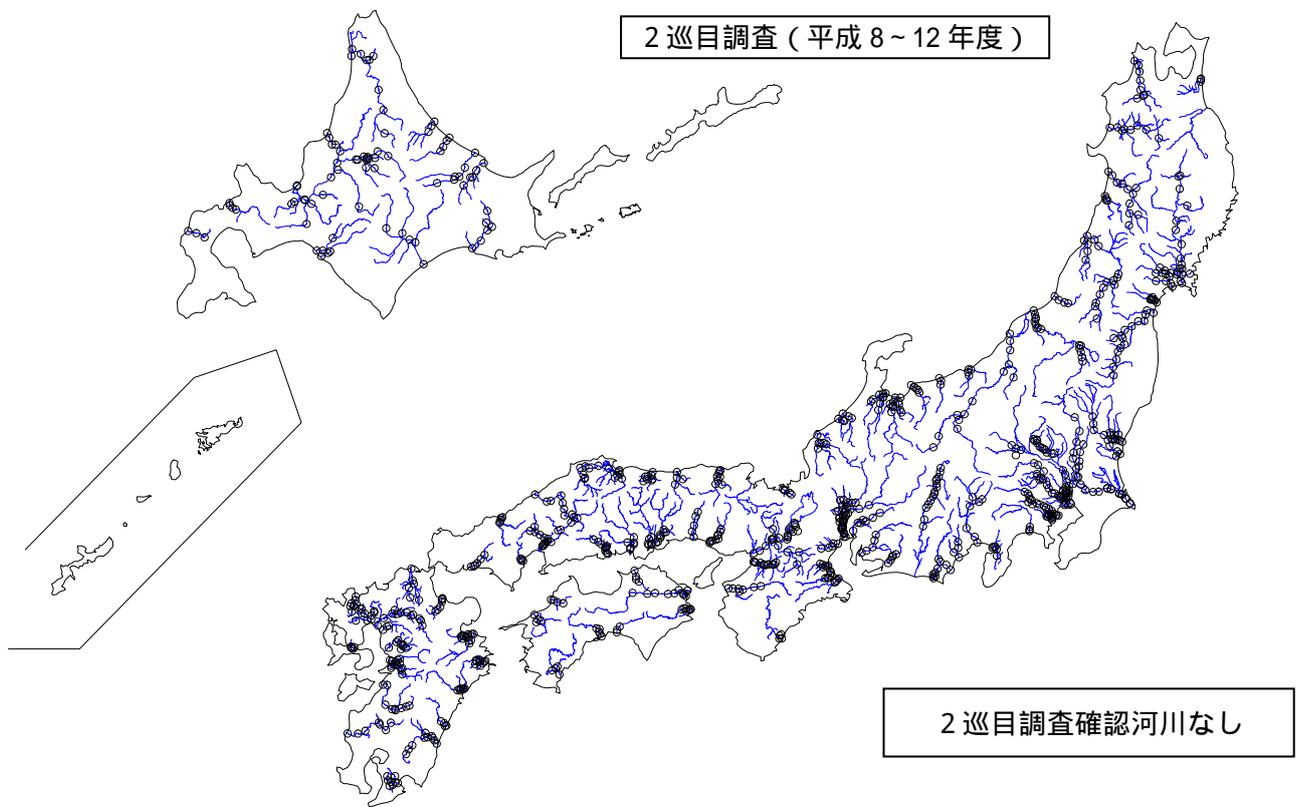
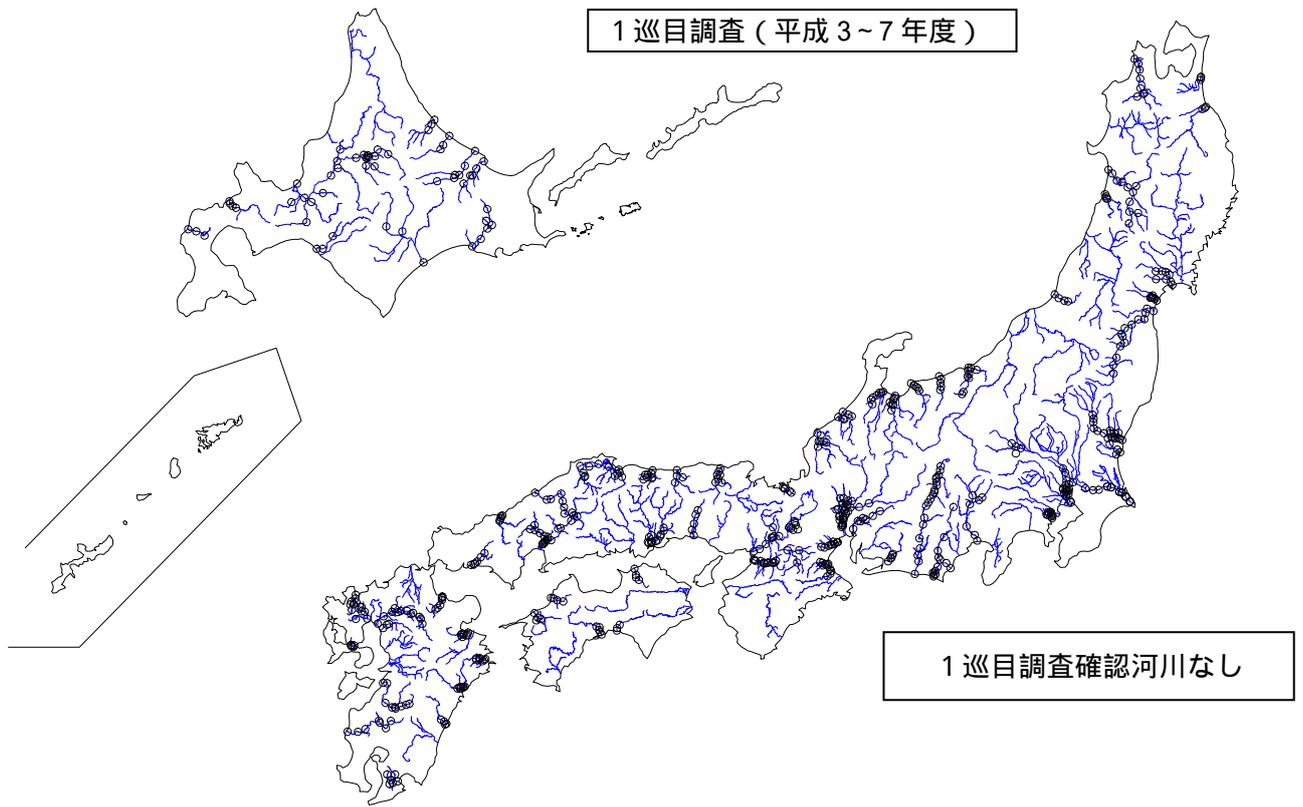
4 巡目調査 (平成 18 ~ 20 年度)



凡例  
 ● : 確認調査地区  
 ○ : 未確認調査地区  
 (注 : 直轄区間のみを示した)  
 (河川名は平成20年度とりまとめ対象河川を示す)

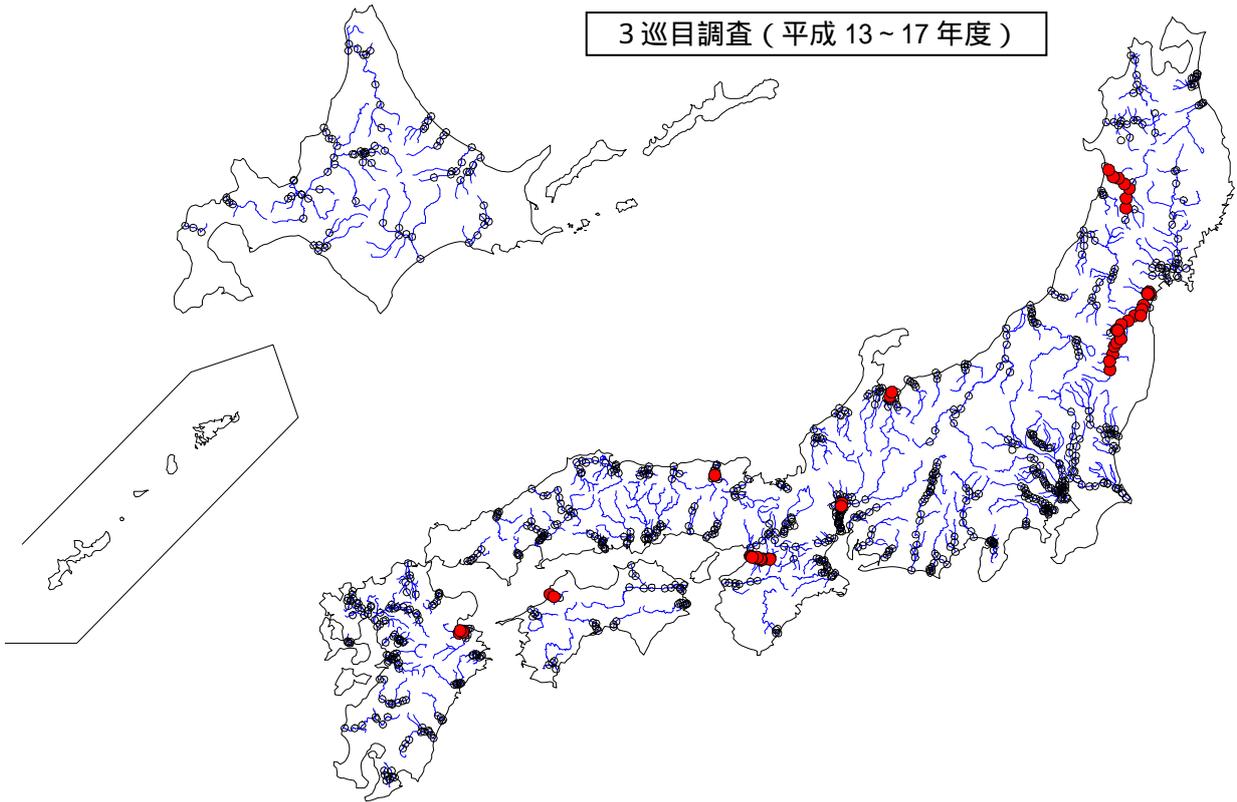
注) 4 巡目調査は調査実施途中で、123 河川中 59 河川が調査未実施である。

アメリカツノウズムシ確認調査地区 (3 巡目調査、4 巡目調査)

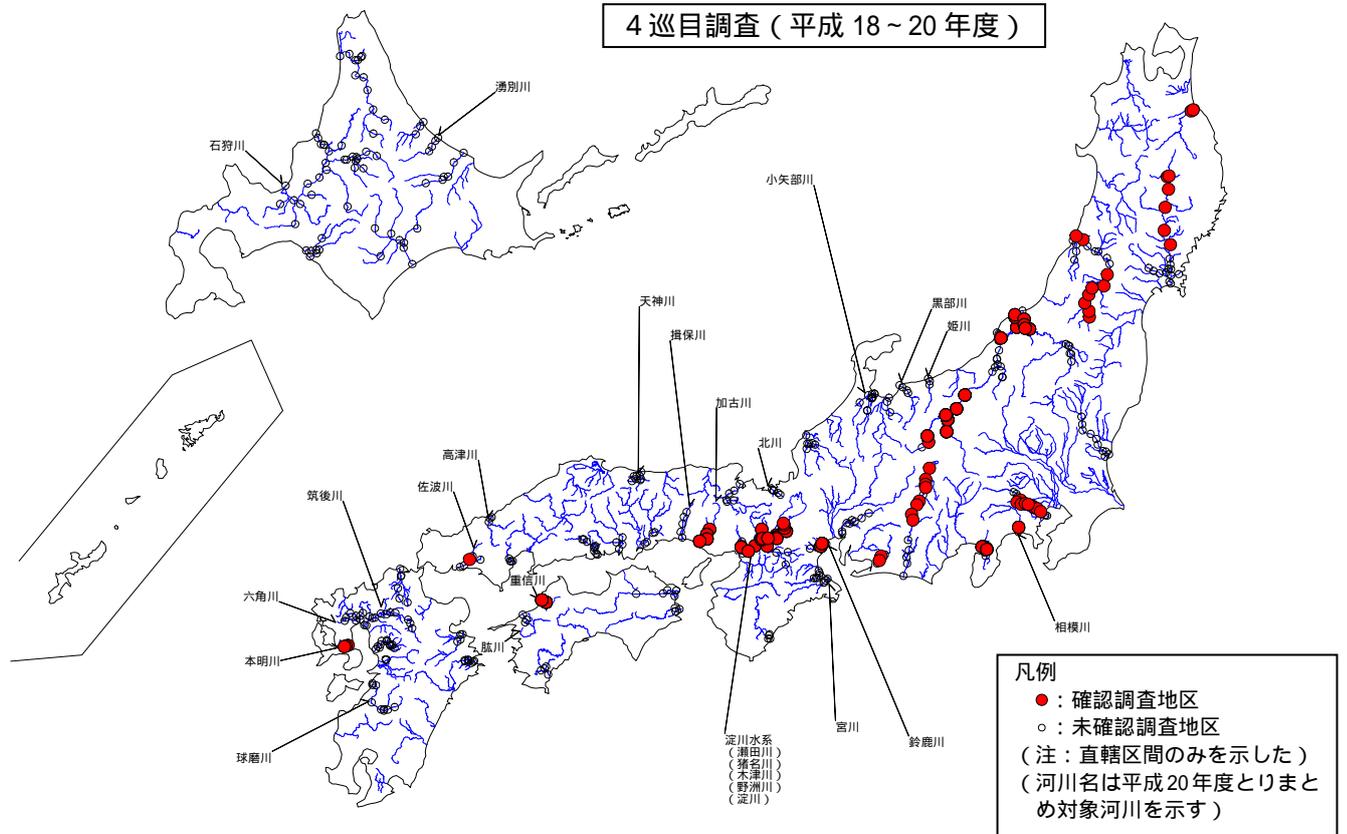


フロリダマミズヨコエビ確認調査地区 ( 1 巡目調査、 2 巡目調査 )

3 巡目調査 (平成 13~17 年度)



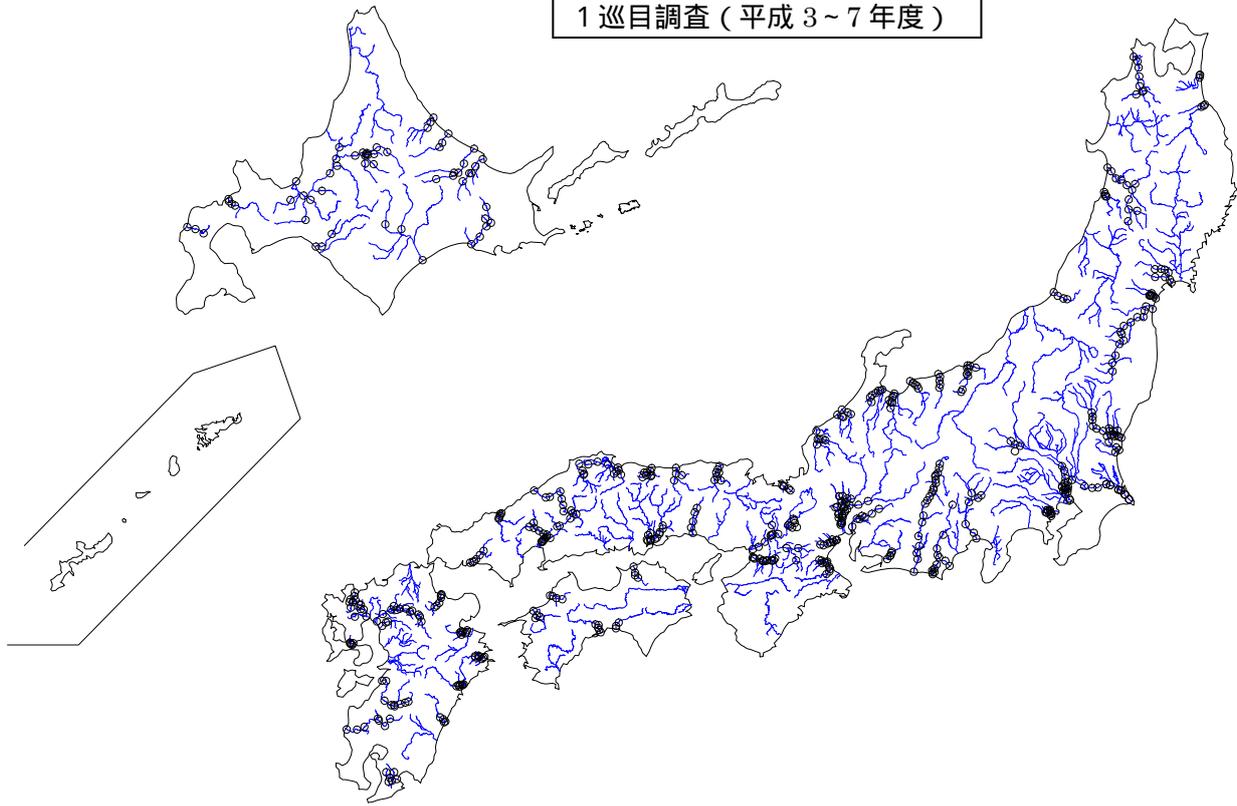
4 巡目調査 (平成 18~20 年度)



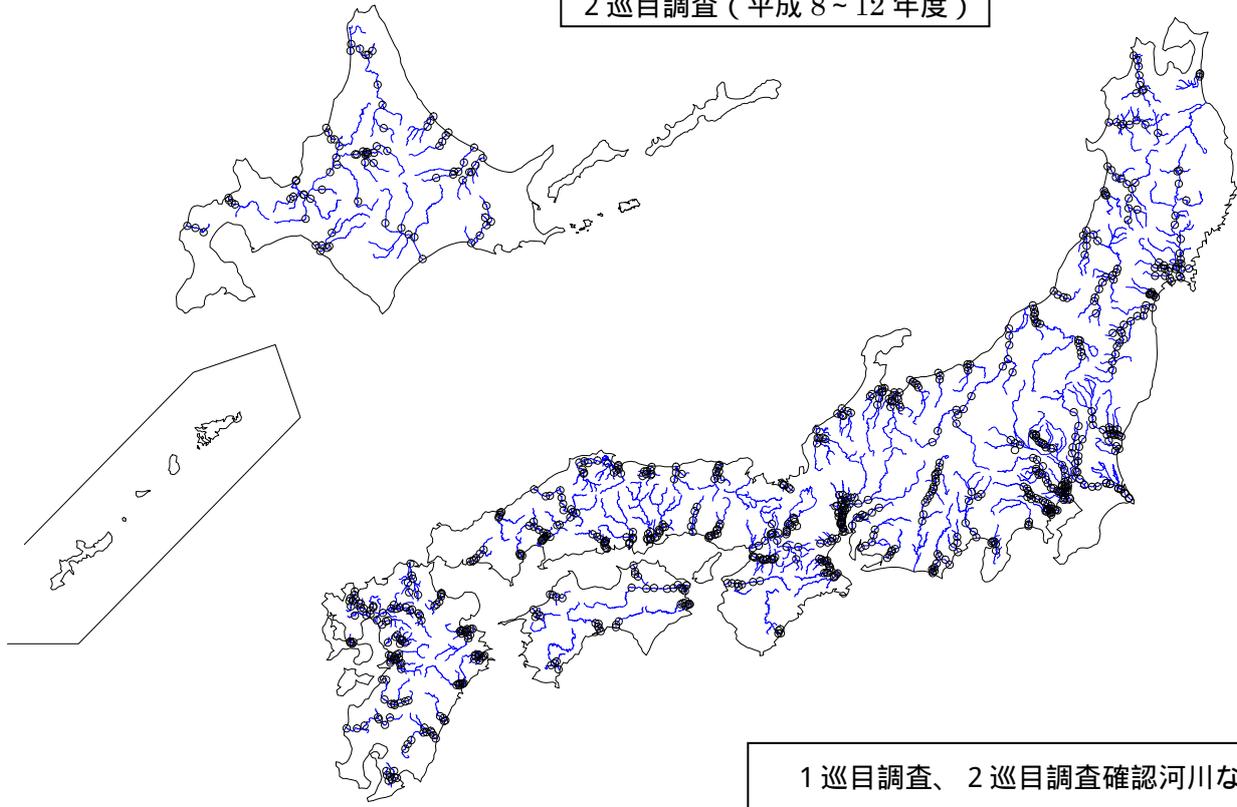
注) 4 巡目調査は調査実施途中で、123 河川中 59 河川が調査未実施である。

フロリダマミズヨコエビ確認調査地区 (3 巡目調査、4 巡目調査)

1 巡目調査 (平成 3~7 年度)



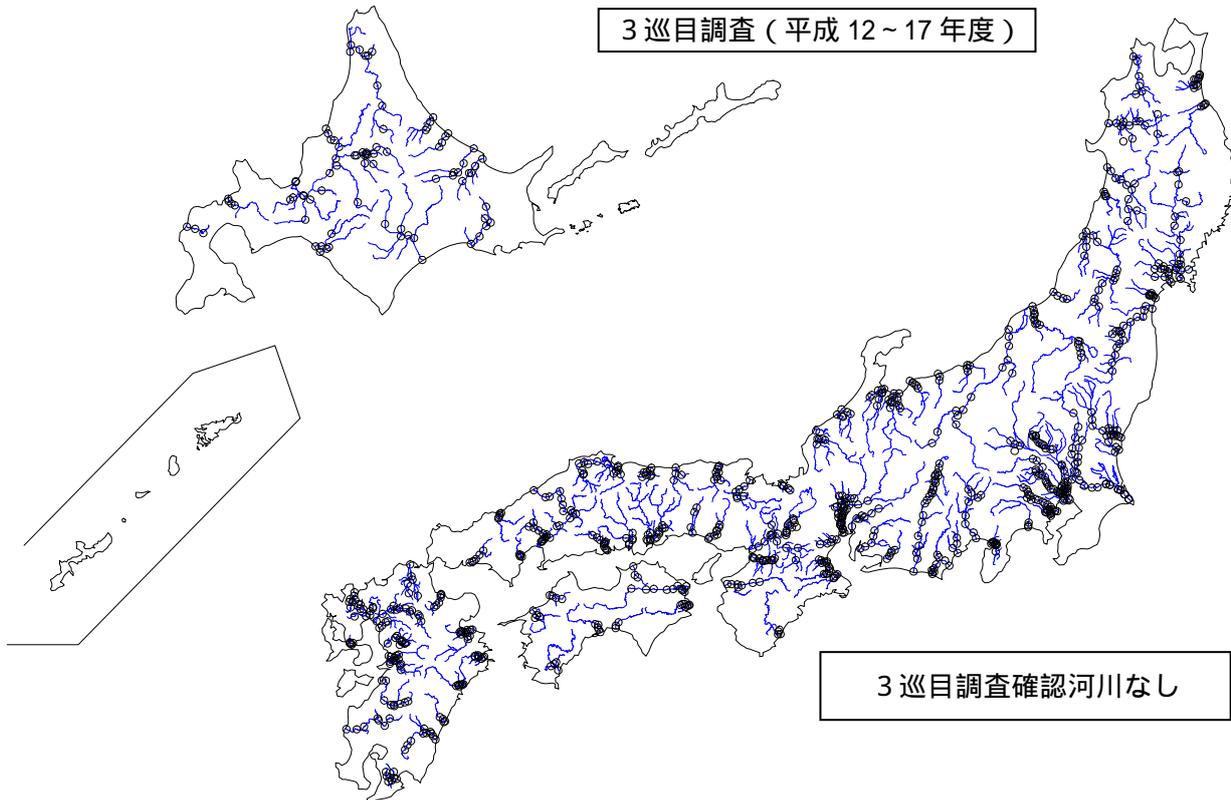
2 巡目調査 (平成 8~12 年度)



1 巡目調査、2 巡目調査確認河川なし

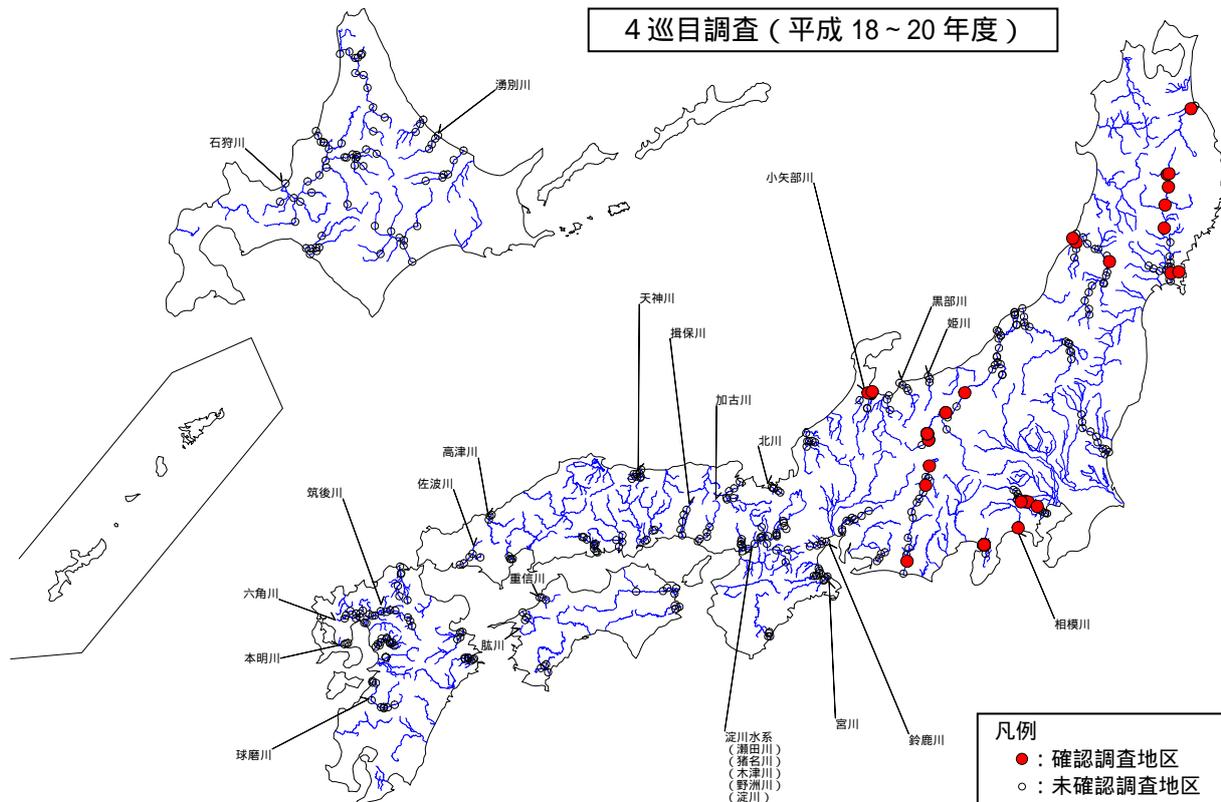
コモチカワツボ確認調査地区 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査（平成 12～17 年度）



3 巡目調査確認河川なし

4 巡目調査（平成 18～20 年度）



凡例  
 ●：確認調査地区  
 ○：未確認調査地区  
 （注：直轄区間のみを示した）  
 （河川名は平成 20 年度とりまとめ対象河川を示す）

注）4 巡目調査は調査実施途中で、123 河川中 59 河川が調査未実施である。

コモチカワツボ確認調査地区（3 巡目調査、4 巡目調査）